

第10回 会社決算書アナリスト試験・出題の趣旨と学習の指針

問題の構成と内容： 構成は、4部構成で、内容は、選択問題（第1問）、収益性の問題（第2問）、安全性の問題（第3問）、投資の問題（第4問）となっている。すなわち、テキストの叙述に沿い、第2問以降は、企業活動の評価分析としての収益性と安全性ならびに投資の分析からの出題になっている。第1問は、テキスト全般から、決算書分析の知識を問う問題である。

第1問は、選択問題であり、第2問以降で触れなかった事項を問い、試験として、決算書アナリストとして決算書分析の総ての範囲の知識を問うことを意図している。テキスト（第4版）により各問の該当のページを示しておく。

1.→P.30～31. 2.→P. 15. 3.→P.12.本問については第3問の決算書も見たい。
4.→P. 21. 5.→P. 18. 6.→P. 54. 7.→P.45、14. 8.→P.65～66. 9.→P.58～59.
10.→P.42.

なお、1. は分析手法の意義、2. から5. は決算書からえられる情報、6. から8. および10. は企業活動と分析指標の関係、9. は分析指標の関係を問うている。

第2問は、収益性に係る問題である（テキスト、第4章）。ここでは、先ず（問1）、実際の損益計算書と貸借対照表を示し、ここから指標を計算する実践力を問うている（テキスト、38、44、47、45、48 ページ）。これを受け、次に（問2）、企業活動の見方を問うている。ここでは、この会社の利益の源泉をどの活動に求められるかを問うた（a, b）後、個別企業の分析から現在の社会情勢ならびに経済政策にも目を向け、この視点からの決算書分析の意義を取り上げている（c, d）。

なお、前期の指標の計算においては前々期の資料が必要であるが、解答には関わりないので、問題文にもあるように掲載していない。

第3問は、安全性に係る問題である（テキスト、第5章）。実際の決算書に接し、これから企業を分析する能力を問うている。先ず（問1）、指標を計算する実践力を問うている（テキスト、58-59、52、60、64 ページ）。これを受け、計算した指標の解釈力を問い（問2）、更に論を展開させ、当該企業の経営戦略を知る推理力を問うている（問3）。ここでは、コロナ禍の中で乗客減を乗り切ろうとする航空業の戦略を明らかにしようとしている。ところで、貸借対照表はストック情報であり、当期の動きを知るには、フロー情報が必要であり、これに応えるのが、キャッシュ・フロー計算書（テキスト、19-21 ページ、第5章4節）であることを実感して欲しいと願っている。つまり、資金の流れを知る点でのキャッシュ・フロー計算書情報の必要性である。同じフロー情報でも損益計算書は利益獲得活動の情報である。

ところで、指標計算には各3点をあてている（第2問、第4問）。これに対し、ここでは、2点に留めている。理由は、同じ指標を計算させているからである。

第4問は、投資に係る問題である。先ず（問1）、株式投資に関わる基本的用語を投資行動

に関係させつつ問うている（第7章）。これに続き（第2問）、株投資にあたって知っておくべき各種指標を実際に計算させている（テキスト、71、42、70、71ページ）。近年、投資教育の重要性が政府により声高に叫ばれている。本問はこれに対応するものである。

まとめ：本試験は実際の例を素材にしている。したがって、アナリストとしての実践力を鍛えるために必要である。

なお、正解に誘導するために、第2問では原資料の数値に一部修正を加えている。図書館等で原資料にあたったとき、数値の違いを指摘される可能性もあるので、付言しておく。